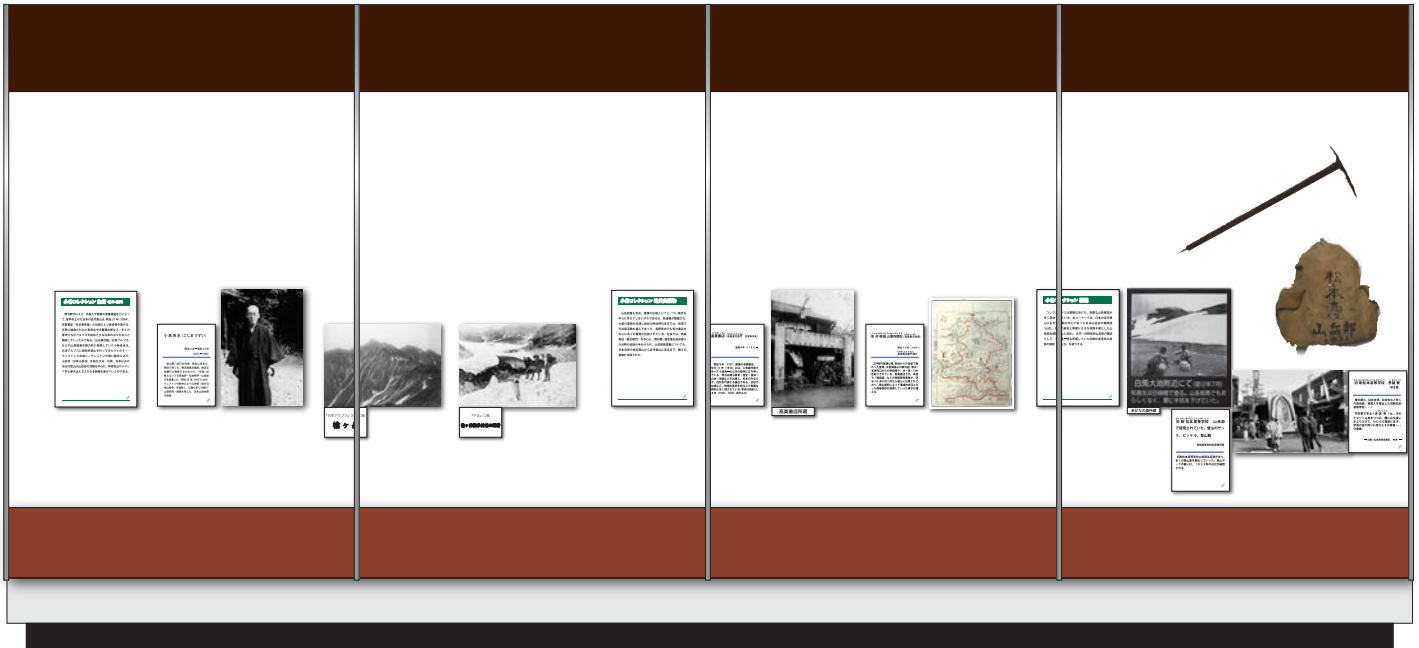


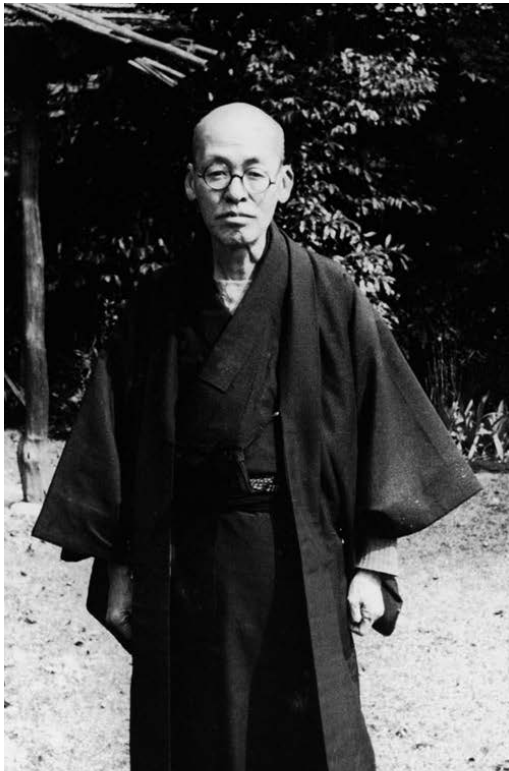
小谷コレクション

和書（日本・近代）

明治時代に入り、外国人や陸軍の測量調査などによって、産声を上げた日本の近代登山は、明治27年(1894)、志賀重昂『日本風景論』の出版により急成長を遂げる。志賀に触発された小島烏水や木暮理太郎など、多くの青年たちがアルプスを始めとする日本の山々を次々と踏破していったのである。『山水無盡蔵』『日本アルプス』などの山岳図書を精力的に発表していた小島烏水は、日本アルプスに開拓的登山を行ってきたウォルター・ウェストンと出会い、ウェストンの強い勧めにより、山岳会(日本山岳会)を設立する。以後、日本における近代登山は山岳会の活動を中心に、学校登山やメディアをも巻き込んでさらなる発展を遂げていくのである。



〈小谷コレクションコーナー〉



40 小島烏水(こじま・うすい) 明治6年—昭和23年(1873—1948)

登山家、紀行文作家。高松に生まれ、横浜で育った。横浜商業卒業後、横浜正金銀行に勤務するかたわら、「文庫」記者となって文芸批評・社会時評・山岳紀行を執筆した。明治38年(1905)にはW. ウェストンの勧めにより山岳会(後の日本山岳会)を創設し、以後も多くの紀行・山岳研究・随想を残した。日本山岳会初代会長。



42 『やま』口絵 槍ヶ岳温泉付近の残雪

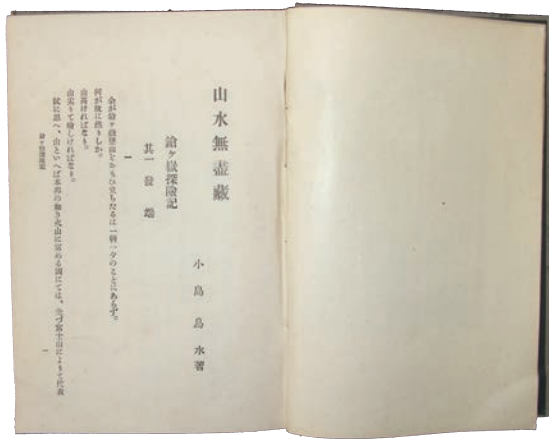


41 『日本アルプス』2巻口絵 槍ヶ岳



30 日本アルプス 小島烏水著 明治43年—大正4年(1910—1915)

日本における近代登山創成期の名著。第1巻には南アルプス白峰山脈、第2巻には富士と北アルプス、第3巻には穂高・槍ヶ岳と万年雪の究明などを綴り、第4巻には、山に関する評論・随想をおさめる。全編を通して、著者の登山と文芸への熱い思いがほとぼしる、山岳書の古典、珠玉の名作である。



31 山水無盡蔵 小島烏水著 明治39年(1906)

烏水の初期著作を代表する書。明治32年(1899)より明治35年(1902)にかけて行われた登山についての紀行文6編が収められている。明治35年(1902)8月、近代登山史に輝かしい足跡を残した槍ヶ岳登攀について記した「槍ヶ岳探検記」の冒頭、近代登山精神に溢れる登山への思いを綴った文章は、あまりにも有名である。本書は島崎藤村の序を付して刊行された。



32 山水美論 小島烏水著 明治41年(1908)

明治36年(1903)より明治39年(1906)にかけて執筆された作品の中から、溪流・平原・植物・風景など自然の景物を題材にした12編を収めた書。自然に対する審美的な論述が多く、近代登山への情熱が綴られる登攀の紀行などとは趣を異にする。「日本アルプスなる名称」では、日本アルプス命名の経緯が記されており注目される。



33 疑問の『槍ヶ岳日記』 小島烏水 (自筆原稿)
大正時代中期

小島烏水の直筆原稿。出版及び所載は不詳。文政年間(1818-1829)に刊行が予定された幻の書『槍ヶ岳日記』について考察し、出版されていれば槍ヶ岳を主題にした最古の文献となった書の未刊を惜んでいる。本原稿の中で、槍ヶ岳を「日本アルプスの王者」と評すなど、烏水の槍ヶ岳に対する思い入れの深さを随所にのぞかせている。



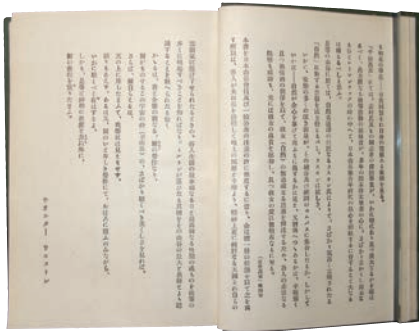
34 日本山嶽志 高頭式編纂 明治39年(1906)

1400頁に及ぶ、日本初の山岳百科辞書。登山術・山岳諸説・日本地質構造概論・日本山岳志・山岳噴火年表・山岳表の7編よりなる。編者である高頭式(1878-1958)は新潟県の大地主の家に生まれ、幼い頃から山岳関係の図書を読みふけたといわれる。本書に引用された文献は140点を数える。



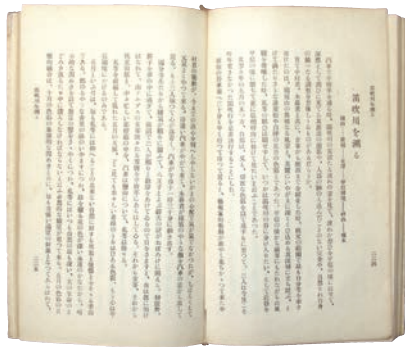
35 富士案内 野中至著 明治43年(1910)

富士山における気象観測を志した野中至(1867-1955)が、明治28年(1895)2月に登攀、9月末より12月22日まで山頂に滞在し、気象観測を行った時の模様を記した書。日本アルピニズムの先駆けともいべき野中の業績は、『富士山頂』(橋本英吉)、『芙蓉の人』(新田次郎)などの名著を生んだ。本書には中村不折の挿絵が付されている。



37 千山萬岳 志村烏嶺著 大正2年(1913)

植物学者および写真家として有名な、志村烏嶺(1874-1961)の紀行文と研究論文を収めた書。「木曾の御岳及び駒ヶ岳」では、従来信仰登山の聖地とされてきた御岳を、豊かな自然を持った景勝地として新たに評価している。日本における近代登山のパイオニア的紀行文である。



38 日本アルプスと秩父巡礼 田部重治著 大正8年(1919)

英文学者である田部重治(1884-1972)が、秩父の山旅から北アルプス・立山・白馬岳の登山について記した書。田部は、木暮理太郎とともに数多くの山登りと山旅を続けた。有名な「笛吹川を遡る」はこの書の一章である。本書には、岩壁や氷雪の山よりも森林や溪谷を愛した著者の、静かな山への憧れ、自然の美しさに対する思慕が綴られている。



39 山行 楨有恒著 大正12年(1923)

日本近代登山史の金字塔である、アイガー東山稜初登攀(大正10年)の山行を中心にまとめられた書。著者の楨有恒(1894-1989)は仙台に生まれ、慶應大学山岳部を創立。卒業後はアメリカ・イギリスに留学し、スイスのグリンデルワイドを拠点に数々の山に登った。帰国後は、近代登山の普及に努め、「近代登山育ての親」と呼ばれる。



36 山の憶ひ出 木暮理太郎著 昭和13年-昭和14年(1938-1939)

近代登山の黎明期に活躍した著者が発表してきた、地誌・紀行文・山岳研究・考証・随想などをまとめた書。木暮理太郎(1873-1944)は群馬県の生まれ。東京大学史学科に入学し、東京市史料編纂所(現東京都公文書館)の編纂官として市史の編纂に携わった。歴史学者らしく綿密かつ精緻な文章で綴られる不朽の名著。